

1. **PERSON** 19・20世紀、ドイツの無神論的実存主義哲学者。主著『存在と時間』で、死への存在と世界内存在への自覚が必要であると説いた。 1
2. ハイデggerの説く、確実に訪れる死とその可能性を直視することで、ただ一人の一回だけの自己の実存に向き合うことができるとした在り方。 2
3. ハイデggerの説く、人間ならではの实存の構造。人間は現存在（単に存在するのでなく、常に「存在とは何か」を問いかける存在）として、他者や事物と関わり合いをもちながらでないとは存在できない。 3
4. ハイデggerが脱却すべきと説いた、本来の自分を見失い、日常性や匿名性に埋没して生きる人間の在り方。 4
5. **PERSON** 19・20世紀、ドイツの哲学者・数学者。現象学の祖。現象学とは、「単なるあらわれ」にすぎない様々な現象についてはエポケー（「判断停止」。数学用語で「括弧に入れる」）という手法で排除することによって、「事そのもの」やそのようにあらわれる条件や構造を明らかにしようとする哲学。ex. 「リンゴに見えるからといってリンゴとは限らない。リンゴに見えるのはなぜだろうか?」。ハイデggerやサルトルも、現象学派。 5
6. **PERSON** 20世紀、仏の無神論的実存主義哲学者。主著『存在と無』で、人間は自己の可能性と未来に向けて開かれた自由な存在（対自存在）であり、可能性を先取りして行動を企てる投企的存在であると説いた。 6
7. **WORD** サルトルが著書『実存主義とはヒューマニズムである』の中で、事物が本質に固定された即自存在であるのに対して、人間は、まずこの世に存在し（実存）、その後で自分が何であるか（本質）を主体的に定義すると説いた言葉。 7
8. **WORD** サルトルが著書『実存主義とはヒューマニズムである』の中で、人間は自由に選んだ行為によって自己を示し、それに全面的に責任を負わなければならない運命にあると説いた言葉。 8
9. サルトルの説く、自分を社会に投げ込んで自己が社会に拘束されると同時に、自己が新しい状況をつくるとする思想。主体的な社会参加の意味。 9
10. **PERSON** 19・20世紀、フランスの哲学・神学者。アフリカで医療・伝道活動を行い、「生命への畏敬」を主張。「密林の聖者」。 10
11. シュヴァイツァーの説く、生あるもの全てを尊重する考え。今日の環境倫理につながる。 11
12. **PERSON** 19・20世紀、インドの政治家・思想家。非暴力・不服従でイギリス支配に抵抗した独立運動の指導者。「インドの父」。 12
13. ガンディーの説く、精神力や愛の力によって勝利すること。この実践が非暴力・不殺生（アヒンサー）であり、イギリス支配に非暴力・不服従で抵抗。 13
14. ガンディーの説く、サッティヤーグラハ（真理把握）の実証。 14
15. **PERSON** 20世紀、旧ユーゴスラヴィアのカトリック修道女。インドのラム街で病人・孤児・貧者の救済活動を行った。 15

T. Q. 「ガンディーの思想の今日的な意義とは？」

T. A.

ガンディーは、サッティヤーグラハ「真理の把持」、ブラフマチャリヤー「自己浄化」、非暴力・不殺生（アヒンサー）の三つを説いた。近代ヨーロッパが、武器をどんどん発達させて暴力に走ってしまった中で、彼は非暴力・不服従によって、暴力的行為よりもはるかに積極的な行動をとって真理を貫いた。そのことがガンディーの思想の今日的な意義である。特に9・11事件以降の世界にとって。